

るから、別途史料編を御予定かとも推察される。もしそうであれば、入船納帳も是非収めて欲しい。最後に花押一覽について、一六八号花押の政國を畠山政國と推定されているが如何であろうか。筆者の推定では、この形状が細川持賢や勝元の花押に類似していることから、この政國は持之の甥（勝元の從弟）で摂津欠郡守護の細川政國の判ではないかと思われる。管見の範囲では從來政國の花押直筆は殆んど知られていなかった（『和田文書』に収む）ので、一六八号の花押は貴重な史料と考えられる。また二四五号花押の常久を「某」とされているのは、有名な細川頼之が康暦の政変で出家して以後の法名である（小川信氏著『細川頼之』のグラビア写真地蔵院文書参照）から念のため。

（A5判 一一八七頁 目録別冊一五三頁  
一九八三年三月 愛媛県 七〇〇〇円）  
（今谷 明 国立歴史民俗博物館助教授）

Alan R. H. Baker and  
Derek Gregory (eds.):

## Explorations in historical geography: Interpretative essays

（歴史地理学における探究  
—— 解釈的試論集 ——）

最近のイギリス歴史地理学界の活発さは顕著である。本書は「斯界の代表的論者」A. R. H. BakerとD. Gregoryが編集の任にあたり、先述の動向を示す一つであるケンブリッジ歴史地理学研究叢書の第五巻である。

さて、本書は五つの試論的論考と対談記録の計六章から成る。まず、第一章では編者Bakerが「歴史地理学とアナール学派歴史学との関係に関する考察」と題し、一九八〇年国際地理学会議（於東京）での彼の報告（『歴史地理学フロシディンクス』、古今書院、一九八二）を予告通り敷衍している。最初に、周知のように最近注目を浴びているアナール学派歴史学が、ブラーシュ人文地理学の原理をより健全・忠実に学習

・実践してきたのに対し、それを怠り、歴史学との交渉にも消極的だったフランス歴史地理学界が衰退を示したのは、一種のパラドックスだとする。このアナール学派歴史学と創始は同時期（一九三〇年頃）ではあるが、その成果を吸収せずにきたイギリス歴史地理学の発展のあとを辿る。地理学と歴史学とを区別させることを目標とし、実用主義的（pragmatic）であった創始者H. C. Darbyの伝統の上に立ちながら、一九六〇年代中葉頃から哲学の領域へ踏み込んでいく歴史地理学者が出る（D. Gregory, M. Billingeなど）。Bakerとしては経済的なテーマとともに社会的テーマの追求も拒まない。Darbyの伝統を發展させ、人工物や行動とともに思想や態度、景観変化の動因としての人間を強調する傾向に注目する。そして、諸個人の様々な結びつきの網を復原し、社会集団の役割を評価する社会的な歴史地理学を提案し、その事例研究として一九世紀フランス農村をとりあげている。

第二章「ジョージ王時代後期・ビクトリア朝初期のイギリスにおけるヘゲモニー・階級・権力——文化地理学をめざして——」ではBillingeが、本叢書第一巻『時代と場

所』での方法論的な議論「過去の社会の復原」を踏まえた考察を行なっている。地主とブルジョワジーは経済的利害関係を消失させつつあったにもかかわらず、一八一九世紀を通じて異なった文化的伝統とイデオロギーを持つ別の社会階級であった。このように、過去の階級間関係にアプローチする場合、経済的な規定だけでなく、イデオロギーや文化的結合（例えば、中産階級が参加したマンチェスター文学哲学協会）の役割をも評価すべきことを示している。

第三章において D. Gregory (以上三人は Cambridge 大) は、「イギリス初期産業革命における階級闘争の地理素描」を行なっている。そして、階級闘争の歴史地理はストライキ・暴動・反乱のみならず、日常生活の営みのなかで顕著にみえる空間構造をも視野に入れるべきであり、また、歴史地理学は地方史と同義ではあり得ず、地方・国・国際レベル間の交点を踏まえたものが必要であることを主張している。

次に、第四章は M. Oveton (Newcastle upon Tyne 大) による「農業革命とイギリス近代初期における農業経済の発達」である。彼は、かつて数多くの論争を

呼んだ農業革命という術語の使われ方、その論争の進展とともに、論争が取り扱った農業変化そのものについて新データをも提供しながら論述している。そのなかで、量測定、理論、イデオロギーといったより広い問題を考えることなしには、農業革命というやや視野の狭い論争史をも取り扱えないことを明らかにしている。そして、農業革命が最近議論を呼ばない理由を踏まえ、この論争を活性化するには、第一に、統計手法を使つての史料操作によって旧知の史料から新しい論拠を発見し、新たな洞察を開くこと、第二に、農業変化一般に関する理論を探究することが必要だとして稿を閉じている。

第五章では R. M. Smith (Oxford 大) が「イギリスにおけるいわゆる『近代化』と中世村落共同体——懐疑論的考察——」と題し、中世共同体概念の再検討が問題となつてきている最近の歴史学（とくに近代史学）の動向を受け、歴史地理学が伝統的に興味を持ってきた村落社会の形態的側面ではなく、「道徳的共同体」の概念に注目し、検討を行なっている。まず、近代初期イギリス社会の主要な側面を概観したのち、特

に社会進化に関する一九世紀の論争に注意を向けながら、最近の動向における解釈の新しいさを考察する。そして、最後に、中世イギリスでの中心—周辺、共同体—国家関係の理解を高めるためには、国王統治下の法、制度、行政機能の研究に歴史地理学も参画することが必要であるとしている。

終章は二人の編者による「歴史地理学における未知の世界——探究的討論——」と題する対談記録である。話題は多岐に及んではいるが、その中心論題は、標題から連想されるような斯学で未開拓である研究対象の列挙ではなく、新しい歴史地理学の方法論的・哲学的問題の提出であると言つてよからう。Gregory は人間の働きかけ (human agency) の概念が重要であり、斯学の中心的課題は、人間の歴史を人文地理のなかで生き生きと示しうする方法を明らかにし、空間構造が社会的行動の条件でもあり、結果でもあることを示す点にあるとしている。一方、Baker は、人間の地平にまで降りた (humanized) 歴史地理学が必要であり、物質生産ではなく人間解放の度合によつて進歩を評価し、文化景観の創造のみならず、社会的協力と支配の地理にも注意を

集中すべきであるとする。そして、外国研究者とも協力しながら、現代に意味のある歴史地理を描き、専門家のみならず、教科書や雑誌、放送などで市民にもアピールする必要がある、と遠大な計画を披露している。

とくに Billinge や Gregory など、構造主義に着目し、人文地理学一般に及ぶ哲学的な議論を提出して昨今盛んに活躍しているが、本書でその議論を踏まえ、試論とはいえ、事例研究を行なっている点が注目される。しかし、終章はさておき、五つの論文は、序文にもあるように本質的に学際的な観点から書かれており、全般的に言って、それらの新しさは理解できても、歴史地理学としての将来像はなお不鮮明の感を否めない。これからのイギリス歴史地理学界の展開に注目していかなねばなるまい。

(Cambridge Univ. Press, 1984, £27.50)

(藤田裕嗣 京都大学大学院生)

## 受贈図書

(一九八四年二月～十月)

高橋康夫著 京都中世都市史研究 (思文閣)

西川長夫著 フランスの近代とボナパルテイズム (岩波書店)

宮内徳雄著 山片蟠桃 (創元社)

金日成主席革命活動史 (平壤朝鮮社会科学院図書館)

Oqyu Sorais Journey to Kai in 1706 (Curzon Pr. London)

龍野市史付図第四巻 (龍野市総務課市史編集係)

千田稔著 飛鳥への古道 (そしえて)

中村哲夫著 近代中国社会史研究序説 (法律文化社)

野田嶺志著 律令国家の軍事制 (吉川弘文館)

小建築の世界 (奈良国立文化財研究所飛鳥資料館)

田村誠一著 建国史 (タムラガーデン)

弓削達訳 初期ビザンツ社会 (岩波書店)

国際アジア・北アフリカ人文科学会議第三十一回 (東方学会)

増村宏著 古田氏の「孫聖老」論説批判 (抜刷)

東京学芸大学日本史研究室編 日本史年表 (東京堂出版)

Sanskrit-Tibetan-English Vocabulary

Tibetan-English Dictionary

Tibetan Grammar

Tibetan Studies (AKADÉMIA KIADÓ, Budapest)

Budapest)

藤野保編 九州と都市・農村 (国書刊行会)

慶尚北道地名由来総覧 (慶尚北道教育委員会)

近藤治編 インド世界—その歴史と文化 (編者)

藤原宮 (奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 図録第十三)

富山県史Ⅵ 近代下、通史編十一 中世 (富山県史編纂室)

◇ ◇

沢山保羅研究 (梅花学園) 七

徳島大学紀要 (徳島大学教育学部) 三三巻

東京商船大学研究報告 三四号

神道学 (出雲大社神道学会) 一一九・一二〇・一二一・一二二・一二三号

立命館産業社会論集 (立命館大学産業社会